

東大寺諷誦文稿注釈〔七〕

— 302行～349行 —

小林 真由美

凡例

【影印】

昭和十四年刊複製本『華嚴文義要決 東大寺諷誦文稿』（佐藤達次郎刊）の「東大寺諷誦文稿」を撮影した。上部に、築島裕編『東大寺諷誦文稿総索引』（平成十三年、汲古書院）による行番号を記した。

【翻刻】

翻字は、『東大寺諷誦文稿総索引』の本文翻刻に準拠する。旧字・異体字・略字・俗字は原則的に現行の新字

体にあらためた。但し「无」「寶」「玠」「尔」「且(檀)」「耶(邪)」「弟(第)」はあらためなかつた。片仮名の
上代特殊仮名遣い甲類のコは「古」、乙類のコは「己」、ア行のエは「衣」、ヤ行のエは「エ」、ワ行のエは「エ」
と表記した。

○内の算用数字は、本文に引かれた連絡線に付けた番号である。↓は連絡線の始点を、↑は連絡線の終点を示
し、①↓ ↑①が一本の連絡線を示す。

□ || 欠損や擦消などにより解読不能の文字。

〔 〕 || 解読困難または解読不能だが、先行書の解読によって挿入する文字。

┌ || 章段の文頭を示すと思われる鈎点。

□・○ || 廓(囲み線)で抹消された文字。

翻刻の行頭の数字は、行番号を示す。

【読み下し文】

翻字、記号等は、【翻刻】に準ずる。連絡線で挟まれた部分は、() の中に入れて連絡線の番号を記した。例
えば、連絡線①で挟まれている部分は、(①釈迦如来を…)とした。連絡線が入れ子になっているときは、外側
を【 ー】にいれ、【①釈迦如来を…(②薬師如来を…)】とした。別案と思われる語句は/で示した。

【文意】

主に現代語訳であるが、適宜補足や省略をおこなっている。連絡線は【読み下し文】と同様に表記する。

【語注】

行頭の数字は、『東大寺諷誦文稿総索引』による行番号である。掲出語句と順番は【読み下し文】による。

「中田書」は、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の略。『総索引』は、『東大寺諷誦文稿総索引』の略。「築島「小考」」は、築島裕「東大寺諷誦文小考」（『国語国文』第二十三卷第五号、一九五四年五月）の略。

本稿は、博士論文「平安初期仏教と文学の研究―『日本霊異記』と『東大寺諷誦文稿』―」付録「東大寺諷誦文稿注釈」に加筆修正したものであり、次の注釈の続稿である。

「東大寺諷誦文稿注釈〔一〕――1行～40行―」（『成城国文学論集』第三十六輯、二〇一四年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔二〕――41行～79行―」（同、第三十七輯、二〇一五年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔三〕――80行～122行―」（同、第三十八輯、二〇一六年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔四〕――123行～167行―」（同、第三十九輯、二〇一七年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔五〕――168行～231行―」（同、第四十輯、二〇一八年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔六〕――232行～301行―」（同、第四十一輯、二〇一九年三月）

『東大寺諷誦文稿』複製本の影印に関して、原本旧所蔵者であり複製本の刊行者である佐藤家よりご快諾を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

致盛等之請 愧已 怖他 何哉 坐野干 云 羅刹 云 我公等及條相注華屋
 首代賢人七百文 飛騰流沙而求法趣千里火燒 法 尚十里之相 甚遠 故後遠
 來時步之倍切德 昔有一王有百夫人元子云 三申 一申 於子與云 在法吾每願以罪盡切德

世中有可修之功德 虛空功德名申 奉誦千手咒 師子月三如來申

誦雪山童子半偈頌 誦行元 云 如來證 云 自誦 此即九常兒鎮心不安時自誦 至親屬冥交臨終所誦丁頁

八火通夜 指通用 燃者生老病死之烟 亮塞四面立水終日 云 流者憂悲

憐之河 稱之潘 即見風強弱者智慧 慧炬難燃 慶慶濟高者或

易沈 五蘊城 梁木棟 傾 丁文 柱 已 毀壞者 三身客人不宿 也下

水濁 穢 者 遍知月不現 七漏疾 也 愚 也 賢 也 共漏 才果 三毒

盛火 也 尊 也 半 也 向所燒 客塵煩惱乃中 也 坐 也 仙 也 種 也 我等 也 不 也 知 也 如 也 貴

女乃不知 也 至 也 黃金 也 心內乃淨 也 我等 也 不 也 見 也 如 也 愚人 也 不 也 觀

能化 也 仙 也 坐 也 近 也 為我等 也 世二相之中 及一乃相 也 交 也 不 也 現 也 八

種好乃中乃一 也 種好 也 不現 也 西方兜率 也 十善之所嚴 元間阿鼻 也

321 320 319 318 317 316 315 314 313 312 311

淋 白玉。能化仙坐^上近^久 為我^了事^了世^二相^一之中^及一^乃相^矣尔^不現^矣
 種好^乃中^乃一^乃種好^矣尔^不現^矣 西方^晚碎^又十^善工^所嚴^无間^阿鼻^矣
 惡工^所造[。]我^等何^生无^間阿^鼻又^謗仙^誦法^人乃^所集^背
 教^尔遠^理尔^豈得^脱既^上大^下財^貴勢^不隳^日月^俱尔^艷頑^壯年^矣
 甚^徒奔^瀾雙^乃解^宴尔^遊无^定之^家尔^連袖^而歌^儻无^常之^在
 猛^力盛^謀日^之費^衰又^桂躋^蘭形^乃夜^之遷^改又^以夫^病免^作飾^矣
 此身^之富^門乃^及貧^久募^心乃^忽成^之又^賤先^代尔^造善^盡决^矣
 虛^尸殘^留荒^野孤^下魂^馳三^途鐵^丸白^口排^迹尔^不簡^尊早^下
 爐^火鑄^湯不^別富^貧鐵^丸白^口肝^碎腸^絕又^銅柱^近身^肉盡^矣
 骨^銷又^或轉^才空^空鈕^輪而^舞尔^或事^久瀆^乃山^而陶^已矣^矣
 當^此時^何尔^親屬^救活^孰知^之人^下來^向云^千箱^之蓄^為現^在活^法
 不^為持^往於^三途^尔故^申其^經名^南无^乎等^大會^云法^華哥^矣持^矣

六初子云

千手經云 謂此陀羅尼人墮三惡道 无有是處 云

南无大 十六大 觀 云

當神咒 云

南无千手千 云 生世大導師 云 界父母 云

先撰東西國已靈等 歲收之布端又是東國之物 寒時尔也 云 丁卯文 綿

端 西國所出 然由官言朝廷者 亦 離 云 已奉卿妻子眷屬中 幸苦操出

不悽寒風霜雪 飢 云 寒 云 遠道 尔 假令几福之人 云 中途得病 不得和

之湯片手之米 不相見親愛妻子老父母 漫遊擐路 東國人作道路前本之

魂魄 西國人作風波之下靈 海濱之尸 留 云 固尔相待親屬 文却不計 丁卯文 知忌日

337 336 335 334 333 332 331 330 329 328

之湯片手之未不相見親愛妻子老父母沒遊擗路東國人作道路荆本之
 魂魄西國人作風波之下靈海濱之尸留留爾相待親屬文都不計丁字知忌也
 留家尔相戀妻子不知其葬又力乃墓之如是類國家尔甚多三途尔諱助
 活故垂平等之諷誦一切祝誦云經華名云心經云阿称云地藏云

其經是三世仙之大祖大坐十二部經中帝王大坐如虛空聚万雲恒沙切德所集
 如大地持一切物万善之所依怙大坐將見仙性之明鏡將昇天堂淨土之金
 車將穿之之惑万下塵之甘露雨將稟天地大福之寶器將涉夫隆殿若海
 之龍船大坐將到泥洹城尔白鳥王將登彼岸尔金橋將得无上菩提大
 即大坐饒須國家之摩尼珠大坐上

弘法大師

之龍船

將到泥湫城尔白宮王將登岸尔金橋將得无上菩提尔

即大生饒湫國家之摩尼珠大生上

仙公

仙公上置主云

立湫玆山頂垂下系

分云

中

云何而得人身

云何而生天人身

云何而得仙金軀の

三業善者心念造經仙

造道橋踏側造井柱菓樹等念是名意業善

後以語名口業善心造

名身業善是文世間功徳其報文

作梵王作帝天作轉云粟散云大

家富貴家未作仙心条仙前

受三皈發菩提心以後於功徳是作善

提目開了文法心是造人心造天身心造井心造心仙心約南法有三品

約南法有三品

一受功功黃天天行行...

349 348 347 346 345 344 343 342

家留貴家未作仙心糸仙前
 提目開又法是造人造天身造并造仙約南法有三品
 一散動而談笑且南是下品南法二以下品信前身不入心二以中品信前身不入心
 月間不入心三以上品信前身入心下品間不得人身中品生天上品成仙以上
 殺使殺人造罪又地獄造功德不入地獄生人間王種家大留家忌昔修
 功德報謗仙法先驗此指已福德第三生入地獄故對仙前丘願言世不生
 造罪家若耶緣來下故已力尔我不作罪云則蒙聖加被不造惡若耶
 緣來合上造惡却不應恒此天宇所造云何人貪留等業方廣疏

【翻刻】（302～303行）

302 世中有可修之功德 虚空功德名^甲 奉誦千手呪 師子月王如来^申

303 誦雪山童子半偈頌^{本縁云} 諸行无云 如来証云 自誦

此即无常呪願心不安時自誦
至親屬善友臨終所即了耳云以上

【読み下し文】（302～303行）

世ノ中ニ修スベキ功德有リ。虚空ノ功德ト名ヅケ申ス。千手ノ呪ヲ誦シ奉ル。師子月王如来ト申ス。

本縁ニ云ク、雪山童子ハ半偈ノ頌ヲ誦ス。諸行无云。如来証云。自ラ誦ス。此レ即チ无常ノ呪願ナリ。心安カラヌ時、自ラ誦ス。親屬善友ノ臨終ノ所ニ至ル。即チ了耳云。以上。

【解説】（302～303行）

「修スベキ功德」として陀羅尼や偈頌の例を挙げている。虚空蔵菩薩や千手観音菩薩の陀羅尼、雪山童子の偈、『涅槃經』の要偈など。

【文意】（302～303行）

この世の中に修すべき功德がある。虚空蔵菩薩の功德と名づけ申しあげる。千手經の陀羅尼を誦し奉る。師子月王如来と申しあげる。

本縁（釈尊の前身譚）によると、雪山童子は、「諸行（無常 是生滅法）」の半偈の頌を誦した。「如来証（涅

槃 永断於生死 若有至心聽 常得無量樂」。自ら誦す。これは即ち無常の呪願である。心が不安定な時に自ら誦す。親族や知友の臨終の所に行く。(即了耳云。以上。)

【語注】(302～303行)

302 虚空ノ功德 「虚空」は「虚空蔵菩薩」の略か。虚空蔵菩薩は密教系の菩薩で、胎蔵界曼荼羅の虚空蔵院の中尊。奈良時代から信仰され、『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』による虚空蔵求聞持法という記憶力成就の修法が行われていた。392行にも「虚空」がある。

302 千手ノ呪 千手千眼觀世音菩薩の呪(陀羅尼)。千手千眼陀羅尼は十数種類の異本・異訳がある。不空訳『千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼』(『大悲心陀羅尼』)など。密教系の觀音菩薩として奈良時代から信仰を集めていた。323行に「千手經云」、324行に「南无千手千云」がある。

302 師子月王如来 不明。『仏說師子月仏本生經』の「師子月如来(師子月仏)」か。『師子月仏本生經』は『法苑珠林』卷第二十六(宿命篇宿習部)に引用されている。また、『仏說仏名經』(十二卷本・三十卷本)の仏名の中に「師子月仏」があり、『起世經』卷第十、『起世因本經』卷第十の中の転輪王の名に「師子月王」がある。303 雪山童子ノ半偈ノ頌 釈尊の前生である雪山童子は、羅刹(悪鬼)から過去仏の半偈「諸行無常 是生滅法」を聞き、残りの半偈「生滅滅已 寂滅為樂」を教えてもらうために、高い木から身を投げて羅刹に施したという。北本『涅槃經』卷第十四、『賢愚經』卷第一などに見える。84行に「雪山童子」、247行に「雪山ニ身ヲ投ゲシ者」がある。

303 如来証 北本『涅槃經』卷第二十二（南本は卷第二十）に、「如来証涅槃 永斷於生死 若有至心聽 常得無量業」の一偈を受持するだけでも涅槃經全てを受持するのと同等の利益があると説かれ、『涅槃經』の要偈とされている。

【翻刻】（304～321行）

- 304 八^{舊通用}火通夜ヨモスメ燃者生老病死之烟充塞四面五水終日ヒネモ流者憂悲苦
- 305 惱之河弥々濬フカ 邪見風強扇者智慧炬難燃癡愛濤高者戒ノ珠
- 306 易沈 五蘊城⁵⁵↓梁ムネ棟ウツ傾カタ差キカヒ柱ノ↑⁵⁶毀壞者三身客人不宿ヤト定ノ
- 307 水濁リ穢ケカ者遍知月不現 七漏疾川ニハ愚モ賢モ共溺オホ 三毒ノ
- 308 盛火ニハ尊モ卓モ同所燒 客塵煩惱ノ中ニ坐仏ノ種ヲ我等カ不テ知如貧
- 309 女ノ不知空^アクタノ 黄金ヲ 心カ内ノ淨土ヲ我等カ不テ見如シ愚人ノ不覲
- 310 淤サ、白玉⁵⁶↓能化ノ仏ハ坐トモ近ク 為我等カ卅二相之中ノ一ノ相ヲタニ不現^給八十
- 311 種好ノ中ノ一ノ種好ヲタニ不現^給 西方兜率八十善工所嚴 无間阿鼻八十
- 312 惡工所造⁵⁷↓我等何生^得 无間阿鼻ハ謗リ仏ヲ誹レル法ヲ人所集^{背キ}
- 313 教ニ違 理ニ豈得脱^{吾曹}↑⁵⁶饒ユタカナル 財貴キ勢ハ不与モ日月俱ニモ 艷頰^{ウルカホ}壯年^{ソム}ハ
- 314 甚從モ奔ハシ瀾 双ナラヘテ臂ヒチ宴ウタ遊无定之家ニ連袖而歌舞无常之庭

315 猛力盛謀ツカハ日々費ツツヒ衰スヌ 桂躰ケイ蘭形ランノ夜々遷ウツッロ改メヌ⑤⑨ ↓ 以老病死カハヲ作カ飾シハナリ

316 此身コノミヲ富トリシ門カドノ反貧サカシク尊ツリシ家□ノ忽ツ成ルテハ賤チ 先代サキノニ造ツリシ善ツキノ尽ツ失ナスレハ

317 虚ウソ尸シ残留ツ荒野カウ野孤ノヒト魂馳マ三途ミチ 鐵丸テツ丸マ向ム口クチ ↑ ⑤⑧ 那落迦ナハ 不簡フ尊卑ソノトモ

318 炉火ロ鑊カ湯カ不別フ富トル貧ヒトモ 鉄丸テツ丸マ向ム口クチ肝碎カ腸絶ツヌ 銅ドウノ柱チウ近チカ時トキニハ身ミニ肉ニク尽ツ

319 骨鎖ボネヌ 或イハ轆オサレテ鈿輪ニ而号ヲ叫イサケヒ 或イハ申ウクス刀山タウ而悶ニ己ニ、ロクエ迷マフ

320 当此時トキ 何ナニイツレノ親属シンカ救濟ク 孰知ナニシル人ヒトカ来問キ云ク 千箱チ之蓄ツモ為レ己ニツア 現在イマノ生活シヤウ

321 故申某經名コトニ 南无平等ナン大会クワイ云ク 生々世々シヤヤ頂戴テイ受持ジュ〔笑〕
法華哥フツ

【読み下し文】(304〜321行)

八火ヤチ通夜ツウニ燃ヒユレバ、生老病死シヤウノ烟エン、四面シヤニ充ツチ塞セル。五水ゴ終日シュウニ流ハルレバ、憂悲ウ苦惱クノ河カ、弥々イ濬ユシ。邪ヤ見ミノ風強フク扇アゲバ、智慧チノ炬燃クエ難ガシ。癡愛チノ壽高シウケレバ、戒ケノ珠沈シュミ易カシ。

五蘊ゴノ城シヤウ (⑤⑤) 梁棟リヤウ傾カキ差サヒ、柱チウノ 毀コレ壞ヤルレバ、三身サンノ客人カキ宿ヤクラズ。定テイノ水濁スイリ穢テルレバ、遍知ヘンノ月現ゲツレズ。七漏シチノ疾ヤクキ川カハニハ、愚グカナルモ賢ケンキモ共トモニ溺オレ、三毒サンノ盛セイナル火ヒニハ、尊ソウキモ卑ヒシキモ同ドウジク焼ヤクカル。客塵カキ煩惱ボウノ中ナカニ隠カクレテ坐ザス仏ブツノ種シュウヲ、我等ワガガ知チラズシテ、貧女ヒンノ空クウノ黄金オウ金ゴンヲ知チラヌガ如トシシ。心ガ内ウチノ淨土ジヤウヲ我等ワガガ見

ズシテ、愚人グノ涙ナミノ白玉ハクヲ觀カンヌガ如トシシ。

【⑤⑥】能化ネノ仏ブツハ近チカク坐ザセドモ、我等ワガガ為レニハ、卅サウ二相ニノ中ナカノ一イチノ相サウヲダニ現ゲンシ給ケルハズ。八十種ハチ好コウノ中ナカノ一イチノ種シュウ好コウヲダニ現ゲンシ給ケルハズ。西方セウ兜率トウハ十善ジュノ工コウノ嚴ケン所ショ、无間ム阿鼻ア鼻ヒハ十惡ジュノ工コウノ造ゾウル所ショナリ。(⑤⑦) 連絡リヤク線セン行コウキ先サキなし)

我等ハ何ノ生ヲカ得ム。无間阿鼻ハ、仏ヲ謗リ法ヲ誹レル人ノ集ル所ナリ。教ニ背キ理ニ違ヘリ。吾ガ曹、豈ニ腕ルルコト得ムヤ。」

饒ナ^{ユタカ}ル財、貴キ勢ハ、日月ト俱ニモセズ。艶^{ウル}ハシキ類^{カホ}、壮ナル年ハ、奔^{ハシ}ル瀾^{ナミ}從^ヨリモ甚シ。臂^{ヒデ}ヲ双^{ナラ}ベテ宴^{ウタケ}シ、定无キ家ニ遊ビ、袖ヲ連ネテ、常无キ庭ニ歌舞ス。猛^{タケ}キ力、盛^{サカリ}ナル謀ハ、日々ニ費^{ツヒ}工衰ヌ。桂ノ牀、蘭ノ形ノ、夜々ニ遷^{ウツロ}ヒ改リス。

(58)老病死ヲ以テ此身ヲ作^{ツクロ}ヒ飾^{カサ}レバナリ。富メリシ門ノ反リテ貧シク、尊クアリシ家^人ノ、忽ニ賤シク成リテハ、先代ニ造リシ善ノ尽^ツキ失セヌレバナリ。虚シキ尸ハ、荒レタル野ニ残リ留リ、孤^{ヒトリ}アル魂ハ、三途ニ馳ル。鉄丸ハ口ニ向フ。

那落迦ハ、尊キト卑シキトモ簡^{エラ}バズ。炬ノ火、鏝^{カナハ}ノ湯ハ、富メルト貧シキトモ別^{ワカ}タズ。鉄ノ丸、口ニ向フ時ニハ、肝碎ケ腸絶エヌ。銅ノ柱、身ニ近ヅク時ニハ、肉尽キ骨鎖^{ツル}リヌ。或イハ釵輪ニ轆^{ササ}サレテ号^{オウ}ビ叫^{サケ}ビ、或イハ刀ノ山ニ串^{クス}ヌカレテ、悶^{ヒトコク}エ迷フ。

此ノ時ニ当リテ、何レノ親属ガ救ヒ濟ハム。孰^シレノ知^シル人ガ来リ問ハム云。千箱ノ蓄モ、現在ノ生活ノ為ニ己ソアレ、三途ニ持チ往ク為ニハアラス。故ニ某^{ナニ}経ノ名ヲ申ス。南无平等大会云。生々世々頂戴受持セム。(哭)法華哥。

【解説】(304〜321行)

標題「誓通用」。仮名書きや連絡線が多く、そのまま読み上げるための原稿であったと思われる。304行と313行

に鈎点がある。304～312行に斜線が引かれているのは、使用済みの印か。304～317は、無常の世に流されるまま、因果応報の自覚なく生きていく我々の姿を修辭的な対句で述べている。317～319行は地獄の責苦の様子、320～321行には、地獄から救済してくれるのは親族でも財産でもなく、「某経」であることを述べる。

【文意】（304～321行）

誓通用

地獄の八火が夜通し燃えて、生老病死の無常の烟が四面に充ちて塞がる。無常の五水が一日中流れ続けるので、憂悲苦惱の河がいよいよ深くなる。邪見の風が強く吹くので、智慧の灯火は燃えがたい。癡愛の波濤が高いので、浄戒の珠は沈みやすい。

五蘊の城が（55）棟や梁が傾いてきしり合い、柱が破れ壊れると、三身の客人（仏）は宿らない。禪定の水が濁り穢けがれると、遍知の月（仏）は現れない。七漏の川の速い流れには、愚かな者も賢い者も共に溺れ、三毒の盛んに燃える火には、高貴な者も卑しい者も同じように焼かれる。客塵煩惱の中に隠れている仏性を我々が知らずにいるのは、貧女がごみの中の黄金を知らずにいるようなものである。心の内の浄土に我々が気付かずにいるのは、愚人が泥の中の真珠に気付かないようなものである。

【56】能化の仏は近くにおいてになるが、私たちのためには三十二相の中の一つの相ですら現してはくたさらない。八十種好の中の一つの種好でさえ現してはくたさらない。西方極樂浄土や兜率天浄土は十善の工匠が莊嚴する所で、無間地獄や阿鼻地獄は十悪の工匠が造る所である。（57）連絡線行き先なし）来世に我等はどんな生を受

けるであろうか。無間地獄や阿鼻地獄は、仏を謗り、法を誹る人々が集まる所である。教えに背き理に違う行いをしてゐるわが仲間も、どうやって地獄を免れることができようか。】

豊かな財、高貴な権勢は、日月とともに永遠であることはない。美しい顔、若い年は、奔る波よりも早く消える。ひじを並べて宴し、定めのない家で遊び、袖を連ねて、無常の庭で歌い舞う。勇猛な力や盛んな野望は、日ごとに衰えていく。桂や蘭のように美しく香り高い肉体は、夜ごとに変貌していく。

(58)老・病・死でこの身をつくろい飾るからである。裕福だった門がかえって貧しく、尊かった家がたちまち落ちぶれるのは、先の世で造った善が尽きて無くなったからなのである。虚ろな屍は荒れた野に残り留まり、孤独な魂は三途に馳せる。地獄の鉄丸は口に向う。)

地獄は身分の尊卑を問わずに人を選ぶ。地獄の炬の火、鏝かみの湯は、富める者も貧しい者も分け隔てをしない。焼けた鉄丸が口に向う時には、肝が碎けて腸がちぎれる。熱い銅の柱が近づく時には、身の肉が熔け落ち骨ばかりになる。或いは釵輪かんりんに轢かれて泣きわめき、或いは刀の山に串刺しにされて悶絶する。

その時になつて、親族の誰が救ってくれるだろうか。どこの知人が来てくれるだろうか云。千箱の貯蓄もこの世の生活のためにこそあり、三途に持つて行くためではない。故に某経の名を申し上げる。南无平等大会云。生々世々に頂戴受持しよう。(哭) 法華哥)

【語注】(304〜321行)

304 八火 八大地獄(八熱地獄)。または、八大地獄に付随する十六小地獄の中の八炎火地獄か。

304 通夜^{ヨモスメ} 「通夜」の下に「ヨモスメ」と仮名があるが、他の文献に未見。

304 五水 五蘊を河水に喩えているか。五蘊は、あらゆる存在の五つの構成要素（色・受・想・行・識）。衆生の身心は五蘊が仮に和合したものであるとされる。

304 終日^{ヒネモス} 「ヒネモス」の初出は『萬葉集』。「乎布^{をふ}の崎漕ぎたもとほり比祢^{ひね}毛須^{もす}尔見^にとも飽くべき浦にあらなくに」

（『萬葉集』巻第十八、四〇三七、大伴家持）。観智院本『類聚名義抄』に、「尽日」「終日」「終朝」に「ヒメ（ネ）モスニ」「ヒメ（ネ）ムスニ」の和訓がある（仏中八五、仏中一三八）。

305 癡愛 愚癡と貪愛。三毒（貪・瞋・癡）の二つ。

306 五蘊 五蘊は304行「五水」参照。

306 傾^{カク}キ差^サヒ 「キカフ」は柱などがまじわりさしむ意か。「錯」や「差」に「キカフ」の和訓がある。「柱桁梁戸

牖^{カク}錯^サ比。古語云伎加比。動鳴事無久。」（『延喜式』巻第八、祝詞、大殿祭）、「錯^{キカフ}」（観智院本『類聚名義抄』僧上

一二六）、「差脱^{キカヒオツ}」（同、仏中一三四）。

307 三身 大乘仏教で説かれる仏の三身（法身・報身・応身）。35行「三身仏」参照。

306 定 精神が一つの対象に集中している状態。瞑想の境地。禅定。「samadhi」（梵語）の漢訳語で、音写語は三昧。

307 遍知 「遍知（智）」は一切の法を知ること。「正遍知」は仏の十号の一つ。

307 七漏 漏は汚れ、煩惱。『涅槃経』に見・思惟・根・悪・親近・受・念の七漏が説かれている（北本巻第二十二）。玄奘の表に「七漏之河」の例がある。「茫々たる三界は、俱に七漏の河に漂い、浩浩たる四生は、咸^{みな}

十纏の波に溺る」(『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻第九)。

307 三毒 もつとも根本的な三つの煩惱。貪・瞋・癡。

308 客塵煩惱 一時的に付着した塵のような煩惱。本来心は清浄であるが、客塵煩惱によって汚れているという心性本浄説による。次項参照。

308 仏ノ種 仏種、仏性。仏となる可能性。「煩惱の中に仏性が隠れている」という表現は、『涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」や如来蔵思想などにもとづく。

309 心ガ内ノ浄土 この世界は本来浄土であり、心のあり方にしたがって浄土になるとする思想にもとづく。『維摩経』巻上の「心浄土浄」や、法相唯識の三身説の変化土、浄土教の唯心浄土などがある。(拙稿「『東大寺諷誦文稿』の浄土」、『成城文芸』第二一九号、二〇一二年六月) 参照。

310 淤^サ、「淤」に「サ、」の仮名がある。「他に用例がなく、あるいは「さざれ」などの下部省略表記形か」(『日本国語大辞典』「^サ淤」補注)。

310 能化ノ仏 能化は他を教化する者で、仏菩薩や高僧をいう。296行に既出。

310 卅二相 三十二の相好。仏と転輪聖王には、三十二種類(三十二相)と八十種類(八十種好)のすぐれた特徴がそなわっているとされる。

310 八十種好 前項参照。

311 西方兜率 西方極楽浄土と兜率天。兜率天は欲界六天の第四で、弥勒菩薩の浄土として信仰されている。

311 十善 不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不悪口・不両舌・不綺語・無貪・無瞋・無見・正見の十善業。十悪を犯

さないうこと。

311 无间阿鼻 八大地獄の中の无间地獄と阿鼻地獄。

310 十悪 身口意の三業が犯す悪業。殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・両舌・貪欲・瞋恚・邪見。

314 臂^{ヒデ} 「肘」 「肘」は「ひぢ」とも「ただむき」とも訓むが、『東大寺諷誦文稿』では仮名を用いて訓み分けてい
る。103行「織^{ソビ}ヤカナリシ肘^{タゲムキ}」【語注】参照。

315 桂ノ躰、蘭ノ形 桂や蘭のように美しい容貌。「蘭桂」は、君子の美質の比喩に用いられる。

315 作^{ツクロ}ヒ飾^{カサ}レバナリ 「飭」（8行）、「嚴」（86行）、「莊」（294行）にも「カサ」の仮名があり、「かざる」と訓んで
いる。

317 狐^{ヒトリ} 「ヒト」の仮名がある。178行には「為^ニ人^一リカ（人^一リガ為^ニ）」の例がある。

317 鉄丸 次行にも「鉄丸」がある。318行〜319行の「炉ノ火」「鑊ノ湯」「銅ノ柱」「鍛輪」「刀ノ山」とともに、地
獄の責め苦。

317 那落迦 地獄。238行に既出。

318 鑊^{カマヘ} 「かなへ」は飲食物を煮る金属製の器。「かなへ」と訓ずる漢字は数種類あるが、「鑊」は足のない魚や肉
の調理用のなべ、または罪人を釜茹でにする刑器。「鑊^{カナヘ}」（観智院本『類聚名義抄』僧上一一九）。

319 骨鎖^{クサ}リヌ 『日本靈異記』に僧智光が地獄で熱い鉄柱と銅柱を抱かされる場面があり、類似の描写がみられ
る。「光就きて柱を抱く。肉みな鎖爛^{クサ}り、ただし骨環^{ほねくさり}のみ存^{のこ}る」（『日本靈異記』中巻第七縁）。

319 悶^{己レ}工^{ロクテ} 観智院本『類聚名義抄』に「悶^{己レ}心^{タエ}」（法下八二二）の和訓がある。

【翻刻】（322行）

322 在今地東方ニ

【読み下し文】（322行）

今地、東方ニ在リ。

【解説】（322行）

▽322行 小書で六文字のみ。「今地」がどこをさすのか不明。

【翻刻】（323～324行）

323 千手経云 誦此陀羅尼人墮三惡道无有是処云 南无大十六大願云 当神呪風云上瀬

324 南无千手千云 沙波世界施无云 生々世々ノ大道師 三界父母一云

【読み下し文】（323～324行）

〔千手経云、此ノ陀羅尼ヲ誦セム人ハ、三悪道ニ墮ツトモ、是ノ処ニ有ルコト无シト云。南无大十六大願云。神呪ノ風ニ当リ云。上瀬。〕南无千手千云。沙波（婆）世界施无云。生々世々ノ大導師。三界父母一云。

【解説】（323～324行）

『千手経』（不空訳『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』など）の功德について述べている。前後の文脈は不明。

【語注】（323～324行）

323 千手経 「千手ノ呪」（302行）参照。

323 十六大願 不明。

324 沙波（婆）世界 我々の住んでいる世界。穢土。

324 施无 「施無畏」か。「施無畏」は観音菩薩の異名。

【翻刻】（325～331行）

325 乞誓東西国亡霊等 蔵形ヲ布端ハ是東国之物産 寒時ニ曳ヒキ蒙カツク綿

326 端ハ西国所出 然由官言朝廷言ニ離テ己本郷妻子眷属中ヲ 辛苦旅路

327 不悽寒風霜雪 飢ウエ寒ヒヤイ遠道ニ 仮令无福之人ハ中途得病 不得一杓ヒヤ

328 之湯片手之米 不相見親愛妻子老父母 没逝旅路 東国人作道路荆本之

329 魂魄 西国人作59 ↓風波之下靈↑59 海浜之尸白 留テ 国ニ相待親屬ハ都不計カソヘ知忌日ヲモ

330 留家ニ相恋妻子不知其葬ハフリノ墓ヲモ 如是類国家ニ甚多 三途ニ誰助

331 濟故垂 平等之諷誦 一切諷誦云 法華名云 心経云 阿弥云 地藏云

【読み下し文】(325〜331行)

〔乞ヒ誓シマクハ、東西国亡靈等。形ヲ藏カクス布ノ端ハ、是レ東国ノ物産ナリ。寒キ時ニ曳ヒキ蒙カクク綿ノ端ハ、西国ノ出ス所ナリ。然レドモ、官ノ言、朝廷ノ言ニ由リテ、己カ本郷ノ妻子、眷屬ノ中ヲ離レテ、旅路ニ辛苦シ、寒キ風、霜、雪ヲ悽シガズ、遠キ道ニ飢ウエ寒ヒヤイ、仮令タトヘバ福无キ人ハ、中途ミチノナカニ病ヲ得、一杓ヒヤノ湯、片手ノ米モ得ズ。親シク愛シキ妻子、老イタル父母ニモ相ヒ見ズ、旅路ニ没セ逝キヌ。東国ノ人ハ道路ノ荆イバノ本ノ魂魄ト作り、西国ノ人ハ(59)風波ノ下ノ靈)海浜ノ白キ尸ト作ル。国ニ留リテ、相ヒ待ツ親屬ハ、都テ忌日ヲモ計カヘ知ラズ。家ニ留マリテ相ヒ恋フル妻子ハ、其ノ葬ハリノ墓ヲモ知ラズ。是ノ如キ類、国家ニ甚ダ多シ。三途ニ誰カ助ケ濟ハム。故ニ平等ノ諷誦ヲ垂レム。一切諷誦云。法華名云。心経云。阿弥云。地藏云。

【解説】(325〜331行)

東国西国の旅路に没した無縁仏を供養する詞章。240〜241行に類似する内容で、東国は陸路、西国は海路の死者

とするとところも共通している。

【文意】（325～331行）

乞ひ願わくは、東西の国の亡霊たちよ。私たちの身体を覆い隠す布の切れは東国の物産である。寒い時に引き被る綿は西国が出荷したものである。しかし彼らは、役人の命令、朝廷の命令によって、自分のふるさとの妻子と親族を離れて、旅路に辛苦し、寒い風や霜や雪をしのぐこともできず、遠路の途上で飢えて凍え、例えば運の悪いものは道中で病気になる、柄杓一杯の湯も、片手一杯の米も得ることができない。親しく愛しい妻子や老いた父母にも会うことができず、旅路で亡くなってしまう。東国の人は道路の荊の本の魂魄となり、西国の人は（59）風波の下（の霊）海浜の白い屍になる。国に留まり待っている親族は、忌日を数えることもない。家において恋しがっている妻子は、彼を葬った墓も知らない。このような者たちは、国家に非常に多い。三途で誰が助け救ってくれるだろうか。そのために平等の諷誦を垂れよう。一切諷誦云。法華名云。（般若）心経云。阿弥（陀仏）云。

地藏（菩薩）云。

【語注】（325～331行）

327 飢エ寒イ 『萬葉集』の山上憶良「貧窮問答歌」に「飢寒」の例がある。「我よりも 貧しき人の 父母は 飢

寒良牟 妻子等は 乞ひて泣くらむ」〔『萬葉集』卷第五〕。

327 仮令バ 14行「仮令バ」【語注】参照。

【翻刻】（332～336行）

- 332 某經^注是三世^注仏之大祖^{大坐} 十二部經中帝王^{大坐} 如虚空聚万雲 恆沙功德所集
- 333 如大地持一切物 万善之所依怙^{大坐} 將見仏性ヲ明鏡 將昇天堂淨土ヲ金
- 334 車 將寂^{シツ}惑^{マド}塵^{マド}ヲ甘露雨 將稟天地大福ヲ寶器 將涉^{ワタ}薩般若ノ海
- 335 之龍船 將到泥洹城ニ白象王 將登涅槃岸ニ金橋 將得无上菩提ヲ大ナル
- 336 印^{大坐} 饒スル国家ヲ摩尼珠^{大坐} 以上

【読み下し文】（332～336行）

注

某經ハ是レ三世ノ仏ノ大キナル祖ニ^{オホマシ}大坐マス。十二部經中ノ帝王ニ大坐マス。虚空ニ万雲ヲ聚ルガ如クニ、恆沙ノ功德ノ集ル所ナリ。大地ノ一切ノ物ヲ持スルガ如クニ、万善ノ依リ怙^{カタ}ム所ニ^{オホマシマ}坐ス。將^{ハタ}仏性ヲ見ル明鏡。將天堂淨土ヲ昇ル金車。將惑^{マド}ヒノ塵^{シツ}ヲ寂^{シツ}ムル甘露ノ雨。將天地ノ大福ヲ稟クル寶器。將薩般若ノ海ヲ涉^{ワタ}ス龍船。將泥洹城ニ到ル白象王。將涅槃岸ニ登ル金橋。將无上ノ菩提ヲ得ル大ナル印ニ大坐マス。国家ヲ饒スル摩尼珠ニ大坐ス。以上。

【解説】（332～336行）

▽332～336行 標題「注」。「某経」を讃嘆する文句を接続助詞「将（ハタ）」で並べており、用例集となっている。

【文意】（332～336行）

某経は三世の仏の偉大な祖であらせられる。十二部経の中の帝王であらせられる。虚空に万雲が集まるように、この経は恆沙（ガンジス川の砂）の数ほどの功德が集まる所である。大地が一切の物を支えているように、万の善がたのみとするところであらせられる。はたまた、心の中の仏性を見る明鏡である。はたまた、天堂や浄土に昇る金の車である。はたまた、惑いの塵を鎮める甘露の雨である。はたまた、天地の大きいなる福を受ける宝器である。はたまた、仏の智慧の海を渉す龍船である。はたまた、涅槃の城に連れて行く白象の王である。はたまた、涅槃の岸へとかける金の橋である。はたまた、無上の菩提を得る大いなる印であらせられる。国家をうるおす摩尼珠であらせられる。以上。

【語注】（332～336行）

332 十二部経 仏の所説を教法によって十二分類したもの。「すべての経典」の意。

333 仏性 仏となる可能性。仏種。308行「仏ノ種」語注参照。

333 天堂浄土 弥勒菩薩の兜卒天と仏の浄土。

334 惑ヒノ塵 「惑」「塵」ともに煩惱の異名。

334 薩般若ノ海 薩般若は一切智の意。仏の智慧が広大なることを海に喩えている。

335 泥洹城 「泥洹」は「nirvāna」（梵語）の音写。涅槃。さとり境地。

335 白象王 象は大力で従順とされ、聖獣として扱われることが多い。釈迦は六牙の白象に乗って摩耶夫人の胎内に入ったとされ、普賢菩薩も六牙の白象王に乗っている（『法華経』巻第八、普賢勸発品）。

336 摩尼珠 宝珠。如意珠（意のままに宝を出す珠）をさす場合もある。

【翻刻】（337行）

337 仏恩賀沐不合

【解説】（337行）

▽337行 小書六文字のみ。「仏恩賀沐」は、誕生仏像を灌沐して仏に報恩する灌仏のことか。灌仏会は、四月八日の釈尊の降誕日に釈尊誕生の姿の像を香水で澡沐する行事。

【翻刻】（338行）

338 仏爪上置土云

立須弥山頂垂下糸云

浄光申句尋

師子申

以上

【読み下し文】（338行）

仏ノ爪ノ上ニ土ヲ置ク云。注須弥山ノ頂ニ立チテ糸ヲ下ス云。句尋ネム。浄光ノ申サク。師子ガ申サク。以上。

【解説】（338行）

▽338行 人身の得難さの比喩。83行「値フコト難ク、聴クコト難キハ」【語注】参照。

【語注】（338行）

338 仏ノ爪ノ上ニ 人身を得て涅槃を得ることの難しさの喩え。「爾の時に世尊、地の少土を取りて之を爪上に置き、迦葉に告げて言はく、「是の土多きや、十方世界の地の土多きや。」迦葉菩薩、仏に白して言さく、「世尊、爪上の土は十方の所有の土に比せざるなり。」「善男子、人の身を捨てて還て人身を得、三悪の身を捨てて人身を受くるを得、諸根完具して中国に生まれ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已りて能く解脱を得、解脱を得已りて能く涅槃に入る有るは、爪上の土の如く、人身を捨て已りて三悪の身を得、三悪の身を捨てて三悪の身を得、諸根具せず、辺地に生じ、邪倒の見を信じ、邪道を修習し、解脱、常・楽・涅槃を得ざるの、十方界の所有の地土の如し」〔北本『涅槃経』卷第三十三〕。

338 須弥山ノ頂ニ立チテ糸ヲ下ス 人身の得難さの喩え。「須弥山」〔妙高山〕は178行参照。「又提謂経云はく、一人有りて、須弥山の上に在り、織縷を以て之を下す。一人、下に在りて、針を持ち之を迎う。中ばに旋風・猛

風有りて、縷を吹けば、針の孔に入ること難し。人身の得難きこと、甚だ是に過ぐ」（『法苑珠林』卷第二十三）。「法皇牟尼は大海の針、妙高の線を借りて、人身の得難きを喩況し」（最澄「願文」）。『法苑珠林』の引く『提謂経』は偽経で散迭しているが、正倉院文書に書名が見える。敦煌本に該当箇所あり。

338 浄光 不明。

338 師子 302 行の師子月王か。

【翻刻】（339～349 行）

339 云何而得人身 云何而生天人身 云何而得仏金軀⑥① ↓ 三業善者 心念 造経仏

340 造道椅 路側造井 植果樹等念 是名意業善 後以口語名口業善 正造

341 名身業善 是ハ世間ノ功德 其報ハ 作梵王 作帝云 作転云 粟散云 大臣

342 家 富貴家 未作仏 正參仏前 受三帰発菩提心以後修功德是作菩

343 提因 聞イハ法ヲ是造人 ヲ造天身ヲ造菩薩ヲ造ソ仏ヲ ↑⑥①約聞法有三品⑥① ↓

344 一散動而談咲且聞是下品聞法 二 ↑⑥① 以下品信聞 不入耳不入心 二 以中品信聞

345 耳聞不入心 三 以上品信聞 入耳入心 下品聞法得人身 中品生天 上品成仏以上云々

346 縦使有人 造一功德不入地獄生人間 王種家 大富家 忘昔修ヒシ

347 功德報謗仏法无驗 由此損已福德第三生入地獄⑥② ↓ 故対仏前立願言 世々不生

348 造罪家 若耶縁来トモ故已トサラニ我不作罪云 則蒙聖加被不造惡 若耶

349 縁来合トモ造惡都^{ヒノマン}不応恒此天守所為云 願力所致↑⑥②云何人貧富等案方広疏

【読み下し文】(339〜349行)

云何ニシテカ人ノ身ヲ得ム。云何ニシテカ天人ノ身ニ生レム。云何ニシテカ仏ノ金軀ヲ得ム。

(60)三業ノ善トイフハ、心ニ念ヒ、經、仏ヲ造リ、道、椅^シヲ造リ、路ノ側ニ井ヲ造リ、果ノ樹等ヲ植エムト念フ。是ヲ意業ノ善ト名ヅク。後ニ口ヲ以テ語ルヲ口業ノ善ト名ヅク。正ニ造ルヲ身業ノ善ト名ヅク。是ハ世間ノ功德ナリ。其ノ報ハ、梵王ト作り、(天)帝ト作ラム云。転ト作ラム云。粟散云。大臣ノ家。富貴ノ家。イマダ仏ト作ラズ。正ニ仏前ニ参リテ、三帰ノ戒ヲ受ケ、菩提心ヲ發シテ、以後ニ功德ヲ修ス。是レ菩提ヲ作ル因ナリ。法ヲ聞クイハ、是レ人ヲ造リ、天身ヲ造リ、菩薩ヲ造リ、仏ヲ造ルゾ。

聞法ニ約^サキテ、三ノ品有リ。

(61)一ニハ散動シテ談ラヒ咲^{カツカツ}フヲ以テ且聞ク、是レ下品ノ聞法ナリ。二ニハ

一ニハ下品ノ信ヲ以テ聞ク。耳^二入ラズ、心ニ入ラズ。二ニハ中品ノ信ヲ以テ聞ク。耳^二聞キテ心ニ入ラ

ズ。三ニハ上品ノ信ヲ以テ聞ク。耳^二入リテ心ニ入ル。下品ノ聞法ハ人身ヲ得。中品ノ聞法ハ天ニ生マル。上

品ノ聞法ハ仏ト成ル以上云々。

縦^{クト}使ヒ有ル人ノ、罪ヲ造リ地獄ニ入ル可キニ、一ノ功德ヲ造ラバ、弟(第)二ノ生ハ地獄ニ入ラズシテ人間ニ生レム。王種ノ家、大キニ富メル家モ、昔修シタマヒシ功德ノ報ヲ忘レ、反リテ佛法ヲ謗ラバ驗无シ。善惡ノ報

ハ无シト誇ラバ、此ニ由リテ、己カ福德ヲ損ヒ、弟（第）三ノ生ハ地獄ニ入ル。

（②故ニ仏ノ前ニ対ヒテ願ヲ立テ言ク、世々ニ罪ヲ造ル家ニ生レズ、若シ耶（邪）縁来ルトモ、故ニ我、罪ヲ作ラズ云。則チ聖ノ加被ヲ蒙リテ、悪ヲ造ラズ。若シ邪縁来リ合フトモ、悪クアラヌコトヲ造ルハ都テ応ハズ。恒ニ此レ天ノ守ル為ノ所ナリ云。願力ノ致ス所ナリ。）

云何ニシテ人ノ貧富等。方広ノ疏ヲ案ズルニ。

【解説】（339～349行）

いかにして人、天人の身を得るか、仏となるかという問に対して、聞法に上品・中品・下品の三品があり、下品の者は人身を得て、中品の者は天に生れ、上品の者は仏と成ると答える。次に、地獄に生れるべきものが一つの功德によつて次の世には人に生れるが、功德の驗を損なえばその次の世では地獄に生れるであろうと述べている。ここに説かれる三品の聞法は未見だが、『涅槃經』に三種の聴法が説かれている。

聴法の因縁は則ち大般涅槃に近づくことを得。何を以ての故に。法眼を開くが故に。世に三人あり。一つには無目、二つには一目、三つには二目なり。無目と言ふは常に法を聞かず、一目の人は暫く法を聞くと雖も其の心住せず、二目の人は専心に聴受して聞くが如くに行ず。聴法を以つての故に、世間の是の如きの三人を知ることを得。是の義を以ての故に、聴法の因縁は則ち大般涅槃に近づくを得。（北本『大般涅槃經』卷

第二十五）

『大智度論』には二種の聴法がみえる。

所謂る聴法の者に二種の人あり。一には但だ聴くのみにして、而も信受して行ぜず。二には聴いて、而して信受し奉行す。〔大智度論〕卷第一百。

途中に連絡線⑥と⑥①が引かれている。連絡線は始点と終点の間を省略・削除するという符号である。連絡線⑥で挟まれた部分には、身口意の三業の善を修すると転輪聖王や富豪に生れることができるが、仏になることはない。三宝に帰依し菩提心を発して功德をおさめることが仏になる因であると述べている。連絡線⑥①で挟まれた部分には、三品のうち下品の聞法だけが書かれている。その後改めて三品の聞法が書かれたようである。連絡線⑥②で挟まれた部分は、仏に向って、たとえ邪縁にめぐり合ったとしても自分は決して罪を犯さないという願を發する文である。

346～349行は斜線で抹消されている。

【文意】(339～349行)

いかにして人の身を得ることができのだろうか。いかにして天人の身に生れることができるのだろうか。いかにして仏となることができのだろうか。いかにしてできるのであろうか。

(⑥③三業(身・口・意の業)の善というのは次のようなことである。心の中で、経や仏を造り、人々のために道や橋を造り、道路の側に井戸を造り、果樹等を植えようと念うこと。是を意業の善と名づく。その後口に出して語ることが口業の善と名づく。実際にそれらを造ることを身業の善と名づく。是我々の住む世間における功德である。その報いとして生まれ変わって梵王となり、或いは天帝となり、転輪聖王となり、粟散王とな

る。或いは大臣の家や富貴の家に生まれる。しかしまだ仏にはならない。正に仏前に参つて、三帰の戒を受け、菩提心を發して、その後には功徳を修す。これが菩提を作り仏となる因である。法を聞くことこそ、人の身に生れ、天人の身を得、菩薩となり、仏となる因となるのである。

聞法には三つの品しながある。

(61) 一には、心が散漫で談らい笑いながらやつと法を聞く、これは下品の聞法である。二には

一には下品の信をもつて法を聞く。耳に入らず、心に入らない。二には中品の信をもつて法を聞く。耳で聞

いて心に入らない。三には上品の信をもつて聞く。耳に入つて心に入る。下品の聞法は人身を得る。中品の聞

法は天に生まれる。上品の聞法は仏に成る。以上云々。

たとえある人が、罪を造り地獄に生れるべきであるところが、一つの功徳を造つたならば、その次の第二の生では地獄に生れず人間に生れるであろう。王族の家、大變富める家に生まれることができたとしても、昔の世で修められた功徳の報であることを忘れ、反対に仏法を謗つたならば功徳の驗はない。善惡の報などないと誇るならば、この行いによつて、自分の福徳を損い、第三の生では地獄に生れるであろう。

(62) 故に仏の前に対つて願を立てて言う。この先に生まれ変わる世々において、罪を造る家には生れまい。もし邪縁がめぐつて来たとしても、ことさらに私は罪を作らない云。すなわち、聖の加護を蒙つて、悪業を造らない。もし邪縁にめぐり合つても、よくない業を造ることなど決してしない。つねに天が守つてくださるからである。願力の致す所である。

いかにして人の貧富等。方広の疏を案ずるに。

【語注】（339～349行）

340 果ノ樹等ヲ植エム 旅人のために道路わきに果樹を植えることは善業である。天平宝字三年（七五九）、「往来の人々のために夏は木陰となり、果実で飢えを癒せるように果樹を植えてほしい」という僧普照の奏状により、六月二十二日の太政官符に「畿内七道諸国の駅路の辺に菓樹を種うるべきこと」とある（『類聚三代格』、『扶桑略記』）。

341 梵王 梵天。梵天王。色界の初禪天で、護法神。

341 粟散 粟散王は、転輪王より以下、一国一州を領する者をいう。小国の王。

348 故ニ 己トサラ 208行にも「故己トサラニ」の例がある。

348 加被 仏や菩薩が衆生に力を与えて利益を与えること。加護。